

総説

文献に見るスピリチュアルケアと読書療法の類似性

—— スピリチュアルケアにおける絵本の有効活用に向けて ——

鶴生川恵美子¹⁾, 中西陽子²⁾

1) 群馬県立県民健康科学大学

2) 元群馬県立県民健康科学大学

目的: スピリチュアルケアにおける絵本活用を有効にするために、絵本選択は重要課題の一つである。そこで、読書療法とスピリチュアルケアに関する研究論文の検討から、両者の類似性を見いだすことにより、セラピーとしての有益な絵本選択のヒントを導き出すことを目的とする。

方法: 日本及び欧米の読書療法に関する研究論文からその概念や有用性について焦点を置き、スピリチュアルケアとの類似性を見出す。

結果: 多くの研究者は、1) 同一化、2) 浄化作用（カタルシス）、3) 洞察という読者が辿るとするC. Shrodesによる読書療法の3段階の理論、あるいは、同様の読書療法の有用性について言及している。加えて、ケア対象者が辿る経過に着目した、読書療法とスピリチュアルケアの間に類似性が見られた。

結論: スピリチュアルケアと読書療法の類似性から、読書療法の3段階に基づいた物語性を包含した絵本活用は、より有益なスピリチュアルケアを可能にすると言える。

キーワード: スピリチュアリティ、スピリチュアルケア、読書療法、絵本

1. はじめに

現在、医療をはじめ様々な分野において、スピリチュアリティを支える援助としてスピリチュアルケアの重要性が高まっている。スピリチュアルケアは、病院におけるチャップレンによる宗教的なかわりや、寄り添いから始まっているが、日本に導入され研究対象となって以来、多種多様な実践方法が示されている¹⁾。

日本でのスピリチュアルケアの第一人者である窪寺は、高機能な医療器具に依存した現代医療に対して、EMB (Evidence-based Medicine) と対比されて取り上げられるNBM (Narrative-based Medicine) の視点がなければ、具体的なスピリチュアルケアの実践は困難であるとし、その理由を、

NBMは患者の人生の物語の重要性に注目するものであり、人生という様々な出来事から成る物語の中で魂の問題の真の意味が表現されるからであるとしている²⁾。

スピリチュアルケアとしての有益なツールの一つとして、音楽、絵画、童話や絵本などの芸術作品が取り上げられている³⁾が、このことは、これらの芸術作品には、いずれもその中にはテーマとして表現される物語があり、NBMの具体的手段の一つとして、文学作品の活用が有益であることを示唆していると言える。

筆者らはこれらの芸術作品の中でも、特に絵本の活用に意義を見出し、先行研究にて、絵本（物語）を用いたスピリチュアルケアの有効性を検討するためのステップとして、死をテーマとした絵

本の内容分析を行った。その結果、それらの物語の多くが、愛する人やペットなどの死に直面し悲しみに暮れる人々の感情表出を促し、心理的苦痛の緩和や心理的安寧の促進の一助となる可能性を秘めていることが示された⁴⁾。

しかし、C. A. Corr が、すべての死に関連した子供向けの本が死別に関する問題について提供しているとは限らない⁵⁾と指摘しているように、死をテーマとし、死について描かれている絵本であっても、必ずしもスピリチュアルケアとしての一手段としての有効性を見いだせるわけではないと考えられる。

それでは、スピリチュアルケアとして、死が差し迫っている人々、死別を経験した人々、また、死以外の危機的状況におかれている人々のケアとして活用し得る絵本とはどのようなものなのか。愛する人との死別や自らの死を意識し危機的状況に置かれた人々にとってのスピリチュアルケアの介入として、絵本活用を想定した場合、処方箋が患者の症状に合わせて異なるように、そのケアに適切な絵本選択は注意深く、十分な分析がなされるべきである⁶⁾。

どのような絵本がスピリチュアルケアにおいてその有効性を発揮することが可能なのかを探るためには、その第一歩として、ケアの一手段として本を活用する治療法である読書療法の理論に着目し、スピリチュアルケアと読書療法の類似性を見出すことによって、有意義な絵本活用の実践方法への検討につなげていくことが必要である。

2. 目的と方法

本論では、まず初めに、著者らの先行研究に基づきスピリチュアリティの定義を再確認したうえで、スピリチュアルケアとはどのようなものであるべきなのか、主要な研究者らによる言説に基づき、本論における概念の定義づけをする。次に、

読書療法の先駆けとなる西欧におけるその歴史的背景を概観したうえで、欧米及び日本における読書療法に関する研究動向、さらに、その中から医療及び子供を対象とした読書療法の実践に関する研究論文に焦点を置き、読書療法の概念や有効性がどのように捉えられているかを確認する。絵本をスピリチュアルケアにおいて活用するためには、ケア対象者はデリケートな問題を抱えている場合が多いため、絵本の選択には十分な注意を払う必要がある。そのため、スピリチュアルケアと本を活用するケアである読書療法を融合させるためにはそこに類似性が求められる。したがって、最後に、スピリチュアルケアと読書療法に関する文献から見いだされた概念や有用性という観点からの類似性を明確にすることによって、スピリチュアルケアにおけるセラピーとしてのより適切な絵本選択の方法を導き出すことを目的とする。

3. スピリチュアリティ

医療の場でいのちの根源的問題に向き合う際、スピリチュアリティという概念は、いのちの問題をどう捉えるかについて大きなヒントを与えうる重要な概念⁷⁾である。看護師が患者のいのちに寄り添い、最も身近な存在として、患者のスピリチュアリティ概念の重要性を把握することを目的に、看護研究におけるスピリチュアリティに対する関心は年々高まっている⁸⁾。

スピリチュアリティの意味や定義に関しては、これまでも多くの研究者によって論議されてきたが、統一された見解には至っていない。筆者らも先行研究のスピリチュアリティの日本と欧米との比較を通し、この概念の定義の分析・考察を行ったが、国籍や文化的背景、歴史的背景、学問的背景など様々な要因の影響を受け、諸説が存在することを確認した⁹⁾。しかし、多くの研究者が共通して、スピリチュアリティとは宗教とは同義語で

はなく、「人生の意味や目的を与える根源的なもの」であると言及していることから、人間が「生の危機」と直面し、触発されたときに「自己喪失」「自己崩壊」「心の動揺」などによって、スピリチュアリティが痛みや Well-being の状態として表面化されるものと捉えられる¹⁰⁾。

4. スピリチュアルケア

スピリチュアルケアは、キリスト教を基盤とした文化をもつ欧米において、パストラルケアの対象を入院患者等に拡大して成立して来た¹¹⁾。

パストラルケアは、キリスト教会の信者への信仰上の配慮として、教会の宣教の枠組みに位置づけられ、聖職者によって執り行われる「魂へのケア」の伝統のなかにあった¹²⁾。また、パストラルケアはキリスト教の宣教の中で展開してきたため、スピリチュアリティの主な焦点は信仰・宗教であった。

1920～30年代に、病院等の患者に対するパストラルケアとカウンセリングの実践場面の活用研究が開始され、1960年代に入り、心理学者である Pruyser がスピリチュアルな側面への診断の必要性を表明し大きく発展した¹³⁾。1970年代には、パストラルケアは精神医学での活用がみられるようになり、患者の宗教的歴史や信条を把握する必要性が述べられた¹⁴⁾。看護の領域においても Fish と Sherry が、パストラルケアが体系化された援助過程で実践されることを強調し¹⁵⁾、その過程でスピリチュアルな側面への診断の必要性についての研究が始まった。また、1960年代後半以降のホスピス運動において、終末期患者に対して全人的ケアの視点が強調され、パストラルケアのアプローチが重視された¹⁶⁾。

終末期がん患者に対するスピリチュアルケアが公に始まったのは、ホスピス運動と重なる。1967年、英国の医師、Cecily Saunders によるセント・

クリストファー・ホスピスの開設によって、スピリチュアルケアの重要性を認識したケアが初めて具体化された¹⁷⁾。日本では、1982年、浜松の聖隷ホスピス、1984年、淀川キリスト教病院のホスピスが、専門のチャプレンによるスピリチュアルケアの開始の始まりである¹⁸⁾。

しかし、時代の変遷や福祉・医療の発展に伴い、対象者の抱くスピリチュアルな課題は、宗教や信仰に関連したことに限らず、生活課題と結びついていると捉えられ、アプローチが変化してきた¹⁹⁾。Fitchett はスピリチュアリティを多角的に解釈し、スピリチュアルな側面を宗教・信仰に限定せず広義に理解した²⁰⁾。このことにより、ケアの対象者が宗教・信仰に関心を示す者に限定せず、多様なスピリチュアルな課題を表す者へと拡大され、ケア従事者は医師、看護師、ソーシャルワーカー等の専門職へと拡大された。

スピリチュアルケアは、患者の QOL を高めるためには不可欠なケアであり、特に人が死の危機や死後の問題などに直面した際に、その問いへの答えを見いだすことを支援するケア²¹⁾であるといえる。現在、日本においても、スピリチュアルケアは宗教的ケアと区別され、対象者のスピリチュアリティ・宗教性に寄り添うケアとして概念化されつつある²²⁾。

スピリチュアルケアの概念もスピリチュアリティの概念と同様に多様であるが、特に次に示された研究者らによるスピリチュアルケアの定義に見いだされた類似性に着目し、本論でのスピリチュアルケアの定義を導き出すこととする。

窪寺は、スピリチュアルケアは、患者の QOL を高めるには不可欠であると述べるとともに日常生活では忘れられていた、目に見えない世界や情緒的・信仰的領域に、人間を超えたものとの関係の中で新たな意味を見つけて、生命の質に生きる価値を見出せるように援助する²³⁾こと、加えて、死に向かって衰える肉体や精神的理解力を受け止

める場所、自分の「アイデンティティ」を確保することへの援助をすることであると述べている²⁴⁾。

同様に、大学で死生学の講義を担当し社会福祉学を専門とする Kenneth J. Doka は、スピリチュアリティを人間に生得的に備わっているものと捉え、危機に直面した時に普遍的に触発されるものである²⁵⁾とし、人間に備わっているとしている超越したものをとらえる感性によって、人間を超えたものとの関連性を見出し、自分の「アイデンティティ」を確保できるようにすることへの援助がスピリチュアルケアである²⁶⁾とする。

Dennis Klass は、「スピリチュアリティは関係性への気づき、特に五感を超えたものとの関係性の気づき²⁷⁾」であり、人間の限界を超えたところに自分と新たな関係を持つことで、生きるための「存在の枠組み」を見つけ、かつ「自己同一性」を見つけることができるように手助けすることがスピリチュアルケアである²⁸⁾と述べる。

窪寺同様、日本におけるスピリチュアリティ研究の一人者である村田は、スピリチュアルケアとはスピリチュアルペインをケアすること捉え、スピリチュアルコーピングストラテジーズで支えること²⁹⁾としている。自身の病気や死を目前にしたことで生じた人生の無意味、無目的、無価値をスピリチュアルペインとして体験している患者の内部で同時に起きている「内的自己の探求と超越」という、いわゆる「魂の仕事」をうまく傾聴³⁰⁾し、「価値観の転換、スピリチュアリティの覚醒、死を超えた将来、他者、自律の回復、新しい存在の意味の回復」という心の動きを、援助的コミュニケーションを用いて、患者自身のスピリチュアルコーピングストラテジーズで支えることがスピリチュアルケアである³¹⁾とする。

以上の言説に基づき、本論においては、「人生の意味や目的を与える根源的なもの」として捉えられているスピリチュアリティが、人間が「生の危機」と直面し、「自己喪失」「自己崩壊」「心の動揺」な

どがスピリチュアルペインとして表面化された時、それらを緩和させ、人間の限界を超えたところに自己との関係性を見だし、生きる意味を再確認することによって、最終的に、「自己同一性」つまり「アイデンティティ」を再び見出すための援助をスピリチュアルケアと捉えることとする。

5. 読書療法

5-1. 読書療法の歴史的背景

スピリチュアルケアにおける絵本活用による介入を実践するにあたり、絵本の選択には十分な注意を払う必要があり、どのように絵本を有用活用させていくかについての明確な指針を見出すことが重要である。危機的状況あるいはデリケートな問題に直面しているケアを受ける対象者の心に訴えかけ、より QOL を高められるような方向へと導くためには、絵本がどのようにケア対象者の感情表出を導き出しているのか、その働きを検証していく必要がある。ここで、絵本を含む文学作品の物語性をケアにおいて活用することを考えると、本を媒体としたケアとしての読書療法である。

読書療法 (bibliotherapy) は古代ギリシャ語の「書物」をあらわす「biblio」と、治療法という意味をあらわす「therapy」から成り立つ言葉である。古代ギリシャ、テーベ (Thebes) の図書館のドアに「魂の癒しの場所」と記されており、テーベの市民は生活の質を高めることを目的として、本を大切にしていたということから、読書療法はテーベの時代にさかのぼる³²⁾。この言葉が文献に登場するのは、16世紀になってからというが、『ガルガンチュア物語』(1534)の作者フランソワ・ラブレーは医師として、処方箋に文学書を書き添えたという³³⁾。カイロの病院では、コーランを読むことを病気の治療の補助とし、19世紀の英米の病院でも、聖書や宗教書を読ませていた。このよ

うに、病気回復を目的とした宗教書の活用が、最終的に病院図書館の発展、さらに、第一次、第二次大戦による陸軍病院の設立による赤十字や救世軍などが組織する図書館の拡充を促した³⁴⁾。室伏の言葉を借りると、西欧文化においては、図書が人間を作り上げ、人間とは何かと問い、人間としての在り方に関与していたため、心と体の病をいやす医学の世界が図書を治療に利用したことは容易に理解できるのである³⁵⁾。

19世紀半ば以降になると、社会の進展に伴い、元来神の啓示の支配のもとにあったとする図書館としての効力が失われ始め、新たな教養読書の時代に突入すると、患者に与える図書は、新聞、数学、哲学、科学さらに文学作品の利用が重要性を増してくることになる³⁶⁾。

読書療法が治療方法として認識されるようになったのは、ごく最近のことであり、20世紀にはいつて、二人の博士、Karl MenningerとWilliam Menningerが読書療法の初期の提唱者となった³⁷⁾。専門家による文献の中に数多くの論文が登場するのは1940年代以降であり、「読者の人格と文学作品との間のダイナミックな交流のプロセス」と読書療法を定義づけたC. Shrodesによる博士論文は、心理療法としての読書療法の理論と方法についての最も優れた論文として注目され、今日の研究分野においても多大な影響を与え続けている³⁸⁾。次に示すShrodesによる読書療法の3つのプロセスは、読書療法の研究においては看過できない重要な理論である。

読書は、他の人間行動と同様に、全体的な人格の機能であるとし、読者は、フィクションやドラマを読むとき、自分のニーズや目標や価値観に合わせて物事を感じる。読書によって引き出される疑似体験には、1) 同一化、2) カタルシス、3) 洞察という過程が含まれ、読者は自分のニーズを満たす意味を投影していく³⁹⁾。文学は人生を直接的にも具体的にも映し出しているの、読者が自

分の経験を生き直すことを可能にする媒体となっている⁴⁰⁾。疑似体験の性質は読者の人格によって決定され、読者自身の概念、他者との関係、世界観を反映する可能性があるが、それらを変えることもできる⁴¹⁾。同一化は、自己確認のみならず、想像力を必要とする文学を媒体として客観的に他者を見ることを可能にさせる。そのような洞察は、読者を他者の限界や力に対する現実的な姿勢を見出すことを可能にさせるだけでなく、他者に対する恐怖や敵意という感情に伴う不安や罪の意識からの解放ももたらす。読者は、物語における登場人物と状況と同一化することによって、かつて経験した不安定な葛藤を再度経験することになるが、最終的には新しい解決へと導かれることになるのである⁴²⁾。

読書療法の明確な定義はないが、日本読書療法学会は、読書によって問題が解決されたり、癒しを得られたりすることを広義の意味での読書療法と捉えている⁴³⁾。読書療法は精神療法やカウンセリングの具体的な技術の一つとして再認識されるようになり、現在では、カウンセラー、心理学者、精神科医、教育者、ソーシャルワーカーなど多岐にわたる職種の従事者によって活用されている⁴⁴⁾。

5-2. 欧米におけるスピリチュアルケアとしての読書療法に関する研究動向

1910年代から1950年代に及ぶ読書療法の研究動向についての研究結果をまとめたWilliam K. Beatty (1926~2002)は、第一次大戦中、1916年版のAtlantic Monthlyの中で、Samuel M. Crothersによって初めてbibliotherapyという言葉が使われた⁴⁵⁾と言及している。読書療法の起源は古いが、研究対象として認識されるようになったのは20世紀に入ってからであり、感情や適応に関する諸問題に対処する際の手助けとしての読書療法の有効性について様々な研究が行われるようになったのは1960年代以降である⁴⁶⁾。

CINAHLでは、2021年現在において、「bibliotherapy」で検索した場合488件の結果が得られるが、「spiritual care」を加えて検索した場合は6件、そのうち本論の目的に合う論文となると2件となる。「spiritual care」に「picture books」及び「literature」をそれぞれ加えて検索をした場合では、検索結果は得られなかった。MEDLINEにおいては、「bibliotherapy」で検索した場合、592件の結果が得られるが、「spiritual care」に「picture books」及び「literature」をそれぞれ加えて検索をした場合では、CINAHLの場合と同様、検索結果は得られなかった。このことは、欧米では読書療法の起源は古く、

読書療法に関する研究は多く散見されるものの、スピリチュアルケアとしての読書療法あるいは、絵本を含む文学作品の活用という観点からの研究は希少であることを示唆している。

そこで、スピリチュアルケアに関する言及がないものも含め、スピリチュアルケアは医療現場が原点であること、絵本活用という観点から多くが子どもを対象としているという点から、医療（看護）や教育等における読書療法に関連した論文に焦点を当て、読書療法の治療的効果に関する研究者の捉え方についての言及を精査し、「読書療法の概念及び有用性」として示すこととする。

表1 欧米の研究者による読書療法の概念及び有用性

年	著書	専門分野	読書療法の概念及び有用性
1987	Cohen, L. J.	看護	読書療法は治療的コミュニケーションの技術が必要とされるため、看護師にとっては自然な介入の一つである。目標は患者が感情を表現し、支援を受けられる環境の中で洞察を得ることによって感情的なストレスを対処していく手助けをすることである。読書療法は、脅威のない、楽しみを与えてくれる経験となり、特に児童文学を使用することは、子供と看護師との討論へのきっかけを提供してくれる ⁴⁷⁾ 。
1989	Timmerman, L., Martin, D., & Martin, M.	教育	良書との出会いによって、自己肯定感、社会適応、感情的ストレスの解放、自己及び他者の権利の受容を高めることができる。また、読書によって、洞察及び批判的考察、分析のための手助けとなり、読者に困難な問題に対する多様な対処方法を提供してくれる ⁴⁸⁾ 。
1990	Pardeck, J. A., & Pardeck, J. T.	社会福祉	幼い子供たちに対する読書療法のプロセスとして、問題を抱えている子供たちと適した本をマッチさせることによって、子供たちが自身と登場人物との間に共通点を見出せるように、援助者は手助けする。援助者の導きにより、子供は自身と同じ問題を抱えた登場人物と同一化することを手助けされ、その登場人物が直面している課題をどのように解決するかを見始め、自身の可能な問題解決を認識していく ⁴⁹⁾ 。
1997	McCarty, H. & Chalmers, L.	教育	読書は危機を乗り越えられるよう手助けするという意味で治療的な性質をもっている。本を通じて、子供は自分以外の他者がどのように問題に直面し解決しているか、さらに不安、ストレス、落胆にどのように直面してきたかを知り、その後、彼らが対処している現実生活の状況に対して深い洞察を得ることが可能となる ⁵⁰⁾ 。
1997	Ahmann, E.	看護	特別な技術はなくとも、本を通じて、子供たちが自身の問題を理解し、感情を表現し、深く考えることによって、自分と同じ問題を抱えている他者の存在に気づき、自身の問題に対処していくのを手助けすることである。子供たちと本を共有することによって、看護師は、子供やその親らに本を通じて助言を提示することが可能となる ⁵¹⁾ 。
1998	Cress-Ingebo, R., Chrisagis, X.	看護	読書療法は、本を通じて登場人物と感情面で同一化することによって、患者が自身の感情を表現し、最終的に自身の病気に関してより深い洞察を得るように導くことである ⁵²⁾ 。
1999	Amer, K.	看護	読書療法は、文学を使用することによって、患者が、自身の抱える問題を知り、物語内の登場人物が同じような状況に対してどのように対処しているかを学び、自身の感情を表現し、洞察を得るように導くものである ⁵³⁾ 。
2004	Berns, C.F.	心理	読書によって、行動における何らかの変化をもたらすことである。文学作品を使うことによって、子供のグリーフを平常化する、建設的にコーピングをサポートする、孤独感を減らす、創造性や問題解決を強化するために努力することなどが可能となる。同じような状況や経験を持った他者について語ることは、子供たちに孤立感、恐怖、臆病な気持ちをより少なくさせ、より希望を持たせることを可能にさせる。そうすることで、子供は、自分が一人ではないということと、他者と共有できる問題に気がつく ⁵⁴⁾ 。
2013	McGuire, S.L., McCarthy, L.S. & Modrcin, M.A.	看護	子供の本は、死の教育や愛する人の喪失に対しての先行的指導としての役割を果たすとともに、死がすべての生物の自然な成り行きであることを提示し、死の体験によって生じる不安や恐怖を軽減する手助けになりうる。さらに、子供たちが、死別の経験を対処し、安心感を得ることによって、心配や不安の段階に生じる感情を育む手助けにもなる ⁵⁵⁾ 。
2018	Malibiran, R., Tariman, J. D., & Amer, K.	看護	読書療法は、文学を使って、患者の良好な精神状態を保ち、多様で効率的な介入をサポートすることである。がんと診断された患者が自身の心配や不安を軽減させ、コーピングスキルを改善するための補助的セラピーとして受け入れられる ⁵⁶⁾ 。
2020	Balint, A., Magyari, J.	神学・腫瘍放射線学	文学作品を使ってグループ討論を行い、自己理解、認知、感情、行動、スピリチュアルにおける患者自身の変化を促す介入として理解される。象徴的な詩的表現にふれるグループ間の交流によって、新たな人生を見出すための価値あるスキル、想像力と創造力を開放させ、人生の意味や目的を再構築していく ⁵⁷⁾ 。

Shrodes が示した、「同一化」「カタルシス」「洞察」という読書療法の3段階の過程に基づき、ケアにおける本の活用の有用性について言及しているのは、Cohen(1987), Pardeck(1990), Cress-Ingrboら(1998)であり、Shrodesの理論を発展させ、研究を進めているPardeckの理論^{注1)}を活用し説明をしているのは、MaCarthyら(1997)とBerns(2004)である。このように、Shrodesの読書療法の3つの段階を応用したPardeckの理論は、基本的にはShrodesの読書療法の3つの段階を応用したものであるため、表1に示された多くの研究者らは、Shrodesの理論に基づき、読書療法の有用性を示していると言える。

加えて、Timmermanら(1989), Ahmann(1997), Amer(1999), McGuireら(2013), Malibiran(2018), Balintら(2020)は、Shrodesの読書療法の理論について言及はしていないが、表1に示されているように、読書を通じて、同じ問題を抱えた登場人物の存在から、自己を理解し、不安を軽減しつつ自らが対処方法を考え、新たな人生の目的を見いだしていく、という読者の肯定的な変化を示している点は、表現の相違はあるが、同様の有用性を示していると言える。

5-3. 日本におけるスピリチュアルケアとしての読書療法に関する研究動向

CiNiiにおいて「読書療法」では、2021年現在、83件、読書療法の英語訳であるビブリオセラピーでは、10件の検索結果が得られる。1962年の阪本による「子供の読書療法について」⁵⁸⁾という論文を始まりとし、2019年の論文へと切れ目なく研究されてはいるが、その数は限定的といえる。子供と読書という観点からの研究、精神医学における活用、大神(1964)による非行少年に試みられた読書療法に関する数々の論文⁵⁹⁾を経て、2000年には村中による養護施設での活用の可能性⁶⁰⁾、さらには2008年には小川による病院における子

供の不安軽減を主たる活用用途とした絵本活用についての研究⁶¹⁾へとその幅が拡大されている。いずれにしても、読書療法は、医療においては、特に精神科及び小児科での治療の補助としての心のケアとして、学校教育においては、自己意識の改革及び精神的成長に焦点が置かれていると言える。

しかし、「スピリチュアルケア」を加えて検索を行った場合は0件であったが、「スピリチュアルケア」に「文学」を加えた場合は18件、「絵本」では1件、「グリーフケア」^{注2)}と「絵本」では3件の検索結果が得られた。「文学」を加えた検索結果は比較的多いように思われるが、内容の精査から、本研究に関連した内容ではないこと、また宗教的ケアとしてのスピリチュアルケアに関する論文が多いことが分かった。

グリーフケアは、死別に関わる悲しみに対するケアといえるが、愛する人との死別という危機的状況に置かれた人々の心のケアをするという観点から、グリーフケアもスピリチュアルケアの一部と捉えることが可能である。したがって、次に示すグリーフケアと絵本に関連する研究も、スピリチュアルケアと絵本に関する研究として捉えることとする。

それでも、スピリチュアルケアという視点からの読書療法の活用のみならず、スピリチュアルケア及びグリーフケアとしての文学作品、特に絵本の活用という観点からの研究は数少なく、目立った議論には至っていないことが分かる。

したがって、読書療法による検索結果から得られた、医療や教育等における読書療法に関する研究論文の中から、読書療法の理論に基づく治療的効果に関して言及された論文を選択し、内容を精査したうえで、上記の表1に倣い、「読書療法の概念及び有用性」として示すこととする。

表2 日本の研究者による読書療法の概念及び有用性

年	著書	専門分野	読書療法の概念及び有用性
1995	滝沢鷹太郎他	医療（小児科）	小児科の長期療養児にとって、病院は生活の場であり、QOLが重要である。読書療法は心の治療としての役割を果たし、小児の精神を安定させるのに効果がある。「同一化」では、登場人物と一体化し、親や友達の特徴を認め、「カタルシス」では、読書を通じて情緒的緊張をほぐし、問題解決によって読者の情緒を浄化する。「洞察」では、問題に対して知的解決法を明確にし、知性と情緒の統合性が成立する ⁶²⁾ 。
2009	木村有里	教育	物語を適切に共有することにより、直接立ち向かうことのできないデリケートな問題と子供との間に「安全な距離」が作られ、健康的な感情表現を引き出し、成長を促進する。子供たちは物語の中で、自分と登場人物を関係づけ（同一視）、解決に向かう中で登場人物とともに経験し、自分の感情的な緊張を開放（カタルシス）させる。さらに、物語の中で起こったことを考える（洞察）ことにより、他者も自分と同じような問題を持っていることに気づき、他者とのつながりを感じる（普遍化）ことが可能となる ⁶³⁾ 。
2011	松尾直博	教育	自己意識が高まり、発達の危機的な様々な問題に遭遇する青年期は、読書によって影響を受けやすい。この時期に、同一視、洞察、感情の発散と安定が促される本を読むことによって自分を見つめるよい機会が得られる ⁶⁴⁾ 。
2015	笹倉剛	教育	絵本を活用することによって、読者は精神的になごみ、癒しの効果を得て、心理的に前向きな変化をもたらすことができる。絵本のメッセージから自分なりにその意味を昇華させ、自己肯定感を向上させることができ、生き方についての気づきを得られる ⁶⁵⁾ 。
2018	松田智子	教育	悲嘆のプロセス12段階に基づく絵本活用のサポートは、1) 悲嘆の感情の発散 2) コミュニケーションの重要性 3) 正しい自己評価とアイデンティティの回復 4) 罪意識の乗り越え 5) 過去に別れを告げ、新たな生活へのスタートをするという段階を経ていくための手助けとなる ⁶⁶⁾ 。
2018	初澤宣子	心理学	読書によって生じる4つの感情である、読むことに喜びを感じる「評価感情」、出来事や登場人物に共感、感情移入をする「物語感情」、言葉や表現委興味を持つ「審美感情」、自己理解や自己意識は変わる「自己変容感情」という「自己変容感情説」は、読書療法の3段階の作用（同一化、カタルシス、洞察）と対応する。文学教材によって、読者は、登場人物に自己を投影し、登場人物の考え方の変化により、自己変容を喚起されやすくなる ⁶⁷⁾ 。
2018	泉順子	英文学	メディアが報道する過剰な〈死〉の氾濫、日常風景から疎外され周縁化されていく個々人の死、医療技術の発展により派生した〈生〉の価値をめぐる問い、など宗教の形骸化が進む現代社会において多様化・複雑化を増す〈生〉と〈死〉について考えるとき、ピリオセラピーは、読むという精神活動を通じて、自らの生を振り返り、最終的には社会に有機的に繋げる方法となる ⁶⁸⁾ 。

表2の結果から、日本においては、滝沢ら（1995）、木村（2009）、松尾（2011）、初澤（2018）らは Shrodes の読書療法の過程及びそれを応用した Pardeck（1993）の理論に基づき、ケアにおける本の活用の有用性について述べている。

一方、笹倉（2015）は、絵本を活用した読書療法を絵本セラピーと呼び、McCarthy らが示した読書療法の特徴「SPIRIT」^{註3)}を絵本セラピーにおいて活用し、泉（2018）は、笹倉の研究を受け、同様に「SPIRIT」の理論を参考にしている。松田（2018）は、グリーフケアのアプローチとしての読書療法を、特に絵本療法と表現し、A. デーケンの悲嘆のプロセス12段階^{註4)}に沿って、読者の感情表出から最終的な自己の成長へと促す読書療法の有効性について言及している。

6. 考 察

6-1. 日本及び欧米におけるスピリチュアルケアとしての読書療法に関する研究動向

日本における読書療法は1960年代から始まっているが、精神医学、更生を目的とした活用が多く、スピリチュアルケアにおける読書療法に関する研究は、そもそもスピリチュアリティという概念が医療及び看護の分野に導入されるようになった1990年代以降から研究対象になったと言える。学校教育におけるカウンセリングとしての役割としてグリーフケアにおける読書療法の活用に関する研究があるが、グリーフケアをスピリチュアルケアの一部としてとらえたとしても、その研究の数は少なく、また、看護分野においてはスピリチュアルケアとしての読書療法という観点からの研究は希少であるというのが現状である。加えて、小児科医療に携わる滝沢らの研究においても、入院患者のQOLの重要性とともに、それに対する対応の不十分さ及び患者用の図書サービス活動の不

足等⁶⁹⁾が指摘されているように、読書療法については古くから、その治療的効果が示唆されているにもかかわらず、研究や実践的介入においては大きな壁があることが窺える。

欧米においては、日本を先駆けて読書療法が行われていることから、読書療法に関する研究は多く散見されるものの、スピリチュアルケアとしての読書療法という観点からの研究となると限定的である。日本と同様に、医療及び看護分野におけるがん患者のQOL向上のための読書活用や、明確にスピリチュアルケアとしての読書療法の研究も希少である。

スピリチュアルケアと読書療法、あるいは、スピリチュアルケアと文学及び絵本といったキーワードによる研究の検索結果が少ないという事実は、医療、看護分野において、がん患者の心理社会的健康問題の軽減における読書療法の有効性について体系的な研究が行われていない⁷⁰⁾こと、スピリチュアルケアの手段としての読書療法はいくつかの論文において書かれているが、手短な説明にとどまっているというのが現状である⁷¹⁾という指摘にも集約されていると言え、実践においては困難な側面がありえるのかもしれない。加えて、Pardeckらが指摘するように、読書療法を単独の方法と捉えるのではなく、他のアプローチとの併用及び総合的なケアの中に取り込まれる補助としての最適な実践方法の検討⁷²⁾⁷³⁾⁷⁴⁾が今後の課題となるであろう。それでも、読書療法という、物語を媒体とした人間回復のケアの方法そのものが、スピリチュアルな存在である私たちの人生の意味や自己回復への導き手になることは言うまでもないことを考慮に入れば、今後重要視されていかなければいけない分野であると言える。

6-2. 読書療法とスピリチュアルケアの類似性にみるスピリチュアルケアにおける絵本活用の有用性

1949年に発表されたShrodesによる博士論文において示された読書療法の理論は、現在読書療法を研究するものにとって看過できない理論であり、日本及び欧米における多くの研究者が、この理論に基づき自身の研究を展開していることが示唆された。Shrodesによる読書療法の3段階に基づき、文献から見出された読書療法の有用性から得られた言葉を要約すると、読書を通じて、読者は、物語の登場人物に自身を重ね合わせること(同一視: identification)によって、登場人物が抱える問題と読者自身が抱える問題との共通点を見出し、自身の苦悩や悲しみの感情を物語を通じて開放させる(感情の放出, 浄化: catharsis)。登場人物との共通点を見出しつつも、物語は読者の心に脅威や不安をもたらすことなく、自己の問題に直面することを可能にする。それによって、読者は自己の感情に注意を向け、深く考えることによって新たな気づきを得て自己への変革につなげていく(洞察: insight)という過程を経ているということである。

以上の考察を踏まえ、ケア対象者の辿る経過という点において、読書療法及びスピリチュアルケアが類似していることを、以下の表に示すことが可能である。

表3 読書療法及びスピリチュアルケアの経過に見る類似性

	読書療法	スピリチュアルケア
第1段階	【同一性】登場人物が抱える問題と読者自身が抱える問題点との共通点を見出す	人生の意味や自己喪失といった状況に陥った際にスピリチュアルペインが現れる
第2段階	【浄化作用(カタルシス)】読者自身の苦悩や悲しみに対する感情を、物語を通じて開放させる	スピリチュアルペインとして現れた感情を開放し表現する
第3段階	【洞察】読者自身の感情に注意を向け、深い考察によって、新たな自己の気づきを得て自己の変革につなげていく	超越的な存在及び他者との関係性の中で自己の問題に対峙し、深い理解ののち、生きる意味を見出し、新たなアイデンティティを構築する

読書療法において、物語の登場人物に自己を重ね合わせ、自己が抱えている問題点との類似性を見いだす第1段階の【同一化】は、スピリチュアルケアにおいては、死別や自己の病による差し迫る死によって人生の意味を失いかけるような危機的状況に陥った際に、スピリチュアルペインが現れる状態に対応させることが可能ではないだろうか。この段階は、共に、自己が現在抱えている問題に直面せざる負えない状況を、苦しみや悲しみといった痛み（ペイン）を伴いながらも真摯に受け止めなければならない状態であると言える。

次に、読書療法において、読者は、物語の登場人物が抱く苦しみや悲しみといった感情を疑似体験することによって、自己の感情との類似点を認識し、共感することで感情を開放するという第2段階の【浄化作用（カタルシス）】を経験する。スピリチュアルケアにおいては、看護師を含む医療従事者あるいは病院付きのチャプレン及び患者を支える家族や友人らが患者らのそばにいる、あるいは、傾聴することによって、その痛みを共有するという状況がそれに対応すると考えられる。この段階では、物語の登場人物と同一化した自己を客観的に見つめること、他者の問題として捉えることによって、同じような問題を抱えている他者の存在に気づき、感情を開放することが可能となるのではないだろうか。また、他者に感情を吐き出すことによって、苦しみや悲しみが軽減されると考えられる。

最後に、読者が、感情の開放を経たのち、自己の問題に対し、同じような状況に置かれた物語の登場人物がどのように問題に対処していくのか、そのコーピングストラテジーやスキルから学びを得ることによって、新たな自己の気づきや自己変革への道を切り開いていくのが、第3段階の【洞察】と言える。自分の気持ちの変化に気づき、一度は失いかけたアイデンティティを新たに構築することで人生の意味を再び見出し前進して行けること

になる。スピリチュアルケアにおいては、寄り添いや傾聴による感情の開放を涙や怒りの形で表すことを通して、自己の置かれた危機的状況に対して落ち着いた気持ちで対峙する。宗教から発したスピリチュアルケアであるからこそ、超自然的な存在である神、宇宙、自然など人間の及ばない偉大な存在に目を向け、その中に存在する自己の命の尊さへの気づきに至るという機会を得ることもつながるのではないだろうか。その様な過程で、患者は一度失った生きる意味を再び見出すヒントを見出し、新たなアイデンティティを構築していくことになる。

このように、危機的状況におかれ、問題を抱えた自己が、自らの問題に対して自らが対処していくというコーピングスキルを高め、再び人生の意味を見出すことができる自己へと変化を遂げていく過程に、スピリチュアルケアと読書療法の類似性を見出すことが可能であると言える。このような両者の類似性から、読書療法の理論に基づいた物語性に着目した絵本を題材として活用することによって、スピリチュアルケアはケア対象者にとってより有益なものになりえると言える。

7. おわりに

一度は人生の意味を失いかけた人々が、ケアをされる受動的な行為を、ケアによって新しい自己を作り出していくという能動的な行為に転換し、死別や、自己の病及び差し迫る死、さらには生きていくうえで生じる諸問題に対して対処し、自己のアイデンティティを再構築していくとき、ケアはその役割を果たせたと言えるのではないだろうか。ケアとはケア提供者が提供するケアを単に受動的に受けるのではなく、ケアの受け手自らが自身を対処していく過程における「生きる意味への援助」⁷⁵⁾であるといえる。

岡本は、人間を人体という物質や精巧な機械と

捉えることによって飛躍した医療が20世紀の医療であるのに対して、「スピリチュアルな領域」についても改めてその重要性を認識していくのが21世紀の医療なのではないか⁷⁶⁾と述べ、様々なケアは、最終的にスピリチュアルケアに収束していく⁷⁷⁾、という山崎氏の言葉を引用しながら、現在及びこれからの医療におけるスピリチュアルケアの必要性を訴えている。

窪寺がNBMMのないスピリチュアルケアの存在が不可能であることを示唆したように、社会福祉学が専門である野口は、ケアという行為における「物語的特性」について言及し、ナラティブアプローチの重要性を訴えている。元来、文学や文芸の分野の用語であった「ナラティブ」(narrative)の臨床領域における意義は、私たちが生きる世界において、「言葉」が重要な役割を果たし、「物語」という形をとることでより大きな力となるという「物語的転回」と呼ばれる現代思想によるものである⁷⁸⁾とし、ケアを始めたという行為、ケアされるという行為が自身を作り、「自己」と他の(新たな)「自己」との出会いを通してそれぞれの自己を作り上げていく関係として、ケアを捉えている⁷⁹⁾。

これらの言及からも、スピリチュアルケアの重要性とともに、その中に物語を活用するナラティブセラピーの重要性を考慮したことによる読書療法の活用の有用性は疑いの余地がないと言える。今後、スピリチュアルケアにおける絵本活用を有効なものとするために、本論で示された読書療法の理論に基づき、読者の心を動かし自己変革へと導いていく可能性を秘めた適切かつ有意義な物語選択の検討が期待される。

スピリチュアルケアは、宗教者のみならず、医療者、哲学者、社会福祉学者らがより多く加わり、患者の人間らしさ、自分らしさという視点から研究が行われる必要がある、今後の研究が期待される領域である⁸⁰⁾。スピリチュアルケアにおける絵本活用においては、文学や芸術に携わる人々もと

もに関わり開拓していくという意味で、医療や看護領域にとどまらず、人文系の学問も含めた学際的な研究が期待される。

8. 研究の限界と今後の課題

本論において検討された文献には限りがあるため、確固たる結論が見いだせたとは言い難いが、スピリチュアルケアと読書療法の概念における類似性に関して、一定の結果を見出すことができたと言える。

今後は、本研究の結果に基づき、ケア対象者の感情の動きに合わせたサポートを可能にする物語性に焦点を当てて、実践的介入においてより適切な絵本の選択を進めていくこととする。また、本論では、筆者らの先行研究において、スピリチュアルケアにおける絵本活用に焦点を置いているため、読書療法の題材として絵本について言及しているが、読書療法は絵本のみならず、物語形式を含むものであれば他の文学作品を題材とすることも可能であろう。

注1) 幼い子供たちに対する読書療法のプロセスとして、以下の3つの段階を挙げて説明している。1) identification (同一化) と projection (投影): 問題を抱えている子供たちが、自身と登場人物との間に共通点を見出すことができるように、援助者は手助けする。2) abreaction (解除反応) と catharsis (浄化作用, カタルシス): 言語, 非言語ともに表現される感情の解放。3) insight (洞察) と resolution (解決): 専門家はクライアントである子供たちを問題への洞察や解決へと導く⁸¹⁾。

注2) 日本において、グリーフケアという言葉が知られ広まったのは、2000年代に入ってからであるが、歴史は古く、Sigmund Freud (1856~1939) の「悲哀とメランコリー」(1917) とい

う論文にさかのぼる。死別の悲しみに対するケアである⁸²⁾。

注 3) 「SPIRIT」は、S : Spirituality (霊性) P : Perception (認知) I : Insight (洞察) R : Relevancy (関連性) I : Integration (統合) T : Totality (全体性) を示す。1) スピリチュアリティ (spirituality) これまでの人生経験の次元では解決できないことが人智を超えた何かしらの力によって解決されうることを認識する。2) 認知 (perception) 改めて周囲を捉え直し、自分がこれまで予想もしなかったであろうことを受け入れる。3) 洞察 (insight) 自分自身とその生活を新たな側面から見つめ直し考えを深める。4) 関連性 (relevance) どういう言葉が自分に響くのかを探求する。5) 統合性 (integration) 自分と世の中の在り方、自分の考えていることと自分が今やっていることのバランスが取れていることを確認する。6) 全体性 (totality) 1) から 5) の機能を通じて人格が陶冶され、自己と世界の関係が再構成されることによって自分の内面が外の世界に与える影響を認める⁸³⁾。

注 4) A. デーケンの悲嘆のプロセス 12 段階: 1) 精神的打撃と麻痺状態 2) 否認 3) パニック 4) 怒りと不当感 5) 敵意とルサンチマン (恨み) 6) 罪意識 7) 空想形成, 幻想 8) 孤独感と抑鬱 9) 精神的混乱とアパシー 10) あきらめ—受容 11) 新しい希望—ユーモアと笑いの再発見 12) 立ち直りの段階—アイデンティティの誕生⁸⁴⁾。

引用文献

- 1) 窪寺俊之 (2004): スピリチュアルケア学序説, 82-86, 三輪書店, 東京
- 2) 前掲書 1), 80
- 3) 前掲書 1), 82-83
- 4) 鶴生川恵美子・中西陽子 (2020): 日本の児童文学における「死」の表象とスピリチュアリ
- ティースピリチュアルケアにおける絵本活用の可能性の一考察—, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 第 15 巻: 57-72
- 5) Corr, C. A. (2004): Bereavement, Grief, and Mourning in Death-related Literature for Children. *OMEGA*, 48(4): 340
- 6) 前掲書 5), 340
- 7) 柏木哲夫 (2007): 終末期医療をめぐるさまざまな言葉, 総合臨床, 56(9): 2744
- 8) 石井恵子・片岡智子 (2003): 文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり, ホスピスケアと在宅ケア, 11(3): 288-297
- 9) 鶴生川恵美子・中西陽子 (2018): 看護研究論文からみるスピリチュアリティの定義—日本と英語圏諸国の比較検討—, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 第 13 巻: 1-13
- 10) 前掲書 9), 5-8
- 11) 岡本宣雄 (2010): スピリチュアリティを焦点としたケアのアプローチモデルに関する研究—パストラルケアにおけるアセスメントの研究史から—, 川崎医療福祉学会誌, 20(1): 89-97
- 12) 深谷美枝・柴田実 (2012): スピリチュアルケアと援助者の宗教性についての実証的研究, 明治学院大学社会学部附属研究所研究年報, 42: 46
- 13) 前掲書 11), 90
- 14) 前掲書 11), 90
- 15) 前掲書 11), 91
- 16) 前掲書 11), 91
- 17) 窪寺俊之 (2008): スピリチュアルケア学概説, 3, 三輪書店, 東京
- 18) 前掲書 17), 3
- 19) 前掲書 1), 36
- 20) 前掲書 1), 36-37
- 21) 前掲書 12), 46
- 22) 前掲書 1), 82

- 23) 前掲書 1), 34
- 24) 前掲書 1), 33
- 25) Doka, K. J. (1993): The Spiritual Needs of the Dying. Doka, K. J. with Morgan, J. D. (eds.): *Death and Spirituality*. New York: Baywood Publishing Company :143-150
- 26) 前掲書 25), 146-147
- 27) Klass, D. (1993): Spirituality, Protestantism, and Death. Doka, K. J. with Morgan, J. D. (eds.): *Death and Spirituality*. New York: Baywood Publishing Company: 51
- 28) 前掲書 27), 51
- 29) 村田久行 (2012): スピリチュアルケア: 生きる意味への援助 (第 12 回学術大会公開講演) *Spiritual Care: Helping Patients Find the Meaning of Life*, 宗教と倫理, (12): 16
- 30) 前掲書 29), 17-19
- 31) 前掲書 29), 17
- 32) Pardeck, J. A., Pardeck, J. T. (1993): *Bibliotherapy: A clinical approach for helping children*. New York: Routledge: 2
- 33) 五十嵐良雄 (2019): 読む薬, 84, アチーブメント出版, 東京
- 34) 前掲書 33), 85
- 35) 室伏武 (1973): 外国における読書療法の研究, 学校図書: 15
- 36) 前掲書 35), 16
- 37) 前掲書 32), 2
- 38) 前掲書 32), 2-3
- 39) Shrodes, C. (1955): Bibliotherapy, *The Reading Teacher*, 9(1): 24
- 40) 前掲書 39), 25
- 41) 前掲書 39), 26
- 42) 前掲書 39), 27
- 43) 前掲書 33), 90
- 44) 前掲書 33), 88
- 45) Beatty, William K. (1962): *A Historical Review of Bibliotherapy*, Graduate School of Library and Information Science. University of Illinois at Urbana-Champaign, In *Library Trends*, 11(2): 106
- 46) 前掲書 32), 3
- 47) Cohen, L. J. (1987): Bibliotherapy: Using Literature to Help Children Deal with Difficult Problems. *Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health*, 25(10): 20
- 48) Timmerman, L., Martin, D., & Martin, M. (1989): Augmenting the helping relationship: The use of bibliotherapy. *The School Counselor*, 36: 293-294
- 49) Pardeck, J. A., Pardeck, J. T. (1990): Using Bibliotherapy in Clinical Practice with Children, *Psychological Reports*, 67: 1044
- 50) McCarty, H., Chalmers, L. (1997): Bibliotherapy intervention and prevention. *Teaching Exceptional Children*, 29: 12-17
- 51) Ahmann, E. (1997): Books for siblings of Children having illness or disability. *Pediatric Nursing*, 23(5): 500
- 52) Cress-Ingebo, R., Chrisagis, X. (1998): Try a Good Book Bibliotherapy as Spiritual Care, *Journal of Christian Nursing*, 15(2): 14
- 53) Amer, K. (1999): Bibliotherapy: Using Fiction to Help Children in Two Populations Discuss Feelings. *Pediatric Nursing*, 25(1): 91
- 54) Berns, C. F. (2004): Bibliotherapy: Using Books to Help Bereaved Children. *OMEGA*, Vol.48(4): 321-336
- 55) MaGuire, S. L., McCarthy, L. S. & Modrcin, M. A. (2013): An ongoing concern: Helping children comprehend death. *Open Journal of Nursing*, 3: 307-310
- 56) Malibiran, R., Tariman, J. D., & Amer, K. (2018): Bibliotherapy Appraisal of evidence for patients diagnosed with cancer. *Clinical Journal of*

- Oncology Nursing*, 22(4): 377-380
- 57) Balint, A., Magyari, J. (2020): The Use of Bibliotherapy in Revealing and Addressing the Spiritual Needs of Cancer Patients. *Religions*, 11(128): 3-4
- 58) 阪本一郎 (1962): 子どもの読書療法について, 青少年問題, 9(7): 52-57
- 59) 大神貞男 (1964): 犯罪少年の読書療法による臨床例, 読書科学, 8(1): ページ不明
- 60) 村中李衣 (2000): 読書療法の可能性—養護施設での読みあいを中心に, 日本文学研究, (35): 61-71
- 61) 小川香織 (2008): 絵本の読み聞かせの心理療法的効果の検討—小児科の診療待ち時間における読書療法的アプローチ, 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, (17): 37-52
- 62) 滝沢鷹太郎・小宅泰郎・阿部薫・沢居正・伝法谷清・作田清貴・掛端不似 (1995): 小児科における読書療法の試み, 医学図書館, 42(1): 40-42
- 63) 木村有里 (2009): 学校での危機介入を支援するために—「子どものグリーフケア」に役立つブックリストを作る—, 学校危機とメンタルケア, (1): 35-48
- 64) 松尾直博 (2011): 中学生の読書と自己意識の関係: 読書療法の観点, 東京学芸大学紀要, 62(1): 210
- 65) 笹倉剛 (2015): 絵本を中心としたビブリオセラピーに関する研究, 神戸親和女子大学原語文化研究, 9: 22-23
- 66) 松田智子 (2018): 絵本から学ぶグリーフプロセス, 奈良学園大学紀要, 9: 147-156
- 67) 初澤宣子 (2018): 読書療法理論医基づく文学読書体験尺度作成の試み, 読書科学, 60(2): 59-67
- 68) 泉順子 (2018): ビブリオセラピーにおける文学作品の効能—文献レビュー—, 明治大学教養論集, 533: 167-168
- 69) 前掲書 62), 44
- 70) 前掲書 56), 377
- 71) 前掲書 52), 14
- 72) 前掲書 32), 48
- 73) 前掲書 54), 331
- 74) 前掲書 56), 377
- 75) 前掲書 29), 20
- 76) 岡本卓也 (2014): 誰も教えてくれなかったスピリチュアルケア, 11, 医学書院, 東京
- 77) 山崎章郎 (2005): 人間存在の構造からみたスピリチュアルペイン, 緩和ケア, 15: 376-379
- 78) 野口祐二 (2002): 物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ, 14, 医学書院, 東京
- 79) 前掲書 78), 36
- 80) 前掲書 1), 41
- 81) 前掲書 32), 12-13
- 82) 島蘭進 (2019): とともに悲嘆を生きる グリーフケアの歴史と文化, 18, 朝日新聞出版, 東京
- 83) 前掲書 65), 27-28 (McCarthy, A.H., Hynes-Berry, M. (2012): *Biblio/Poetry Therapy The Interactive Process: A Handbook*. North Star Press of St. Cloud, 204-214)
- 84) アルフォンス・デーケン (1986): 〈叢書〉死への準備教育 死を看取る, 261-265, メジカルフレンド社, 東京

Similarities between Spiritual Care and Bibliotherapy:

A Literature Review of the Effective Use of Picture Books in Spiritual Care

Emiko Ubukawa¹⁾ and Yoko Nakanishi²⁾

1) Gunma Prefectural College of Health Sciences

2) Gunma Prefectural College of Health Sciences (affiliation where work was completed)

Objective: The aim of this paper was to elucidate the relationships between spiritual care and bibliotherapy in order to search for the appropriate choice of picture books, which should be selected more carefully for those who have sensitive or delicate issues in spiritual care.

Methods: From the selected literature on bibliotherapy in Japan, Europe, and the USA, the efficacy and concept of bibliotherapy were examined. In addition, based on the general concept of spiritual care defined by some researchers, the similarities between spiritual care and bibliotherapy were considered.

Results: Generally, researchers suggested the efficacy of bibliotherapy based on the bibliotherapy process consisting of three phases, (1) identification, 2) catharsis, and 3) insight), which were shown by Shrodes, a pioneer in the development of bibliotherapy, and some of them also referred to the effectiveness of bibliotherapy based on a concept similar to Shrodes' theory. As a result, the three stages of the bibliotherapy process may correspond closely to the phases of spiritual care, which serves as supportive care for those who have sensitive problems.

Conclusion: The similarities between spiritual care and bibliotherapy suggest that using picture books in which a storyline is developed based on the three stages of bibliotherapy is more significant in spiritual care. It is hoped that the result can assist in the appropriate choice of picture books for those who need spiritual care.

Keywords: spirituality, spiritual care, bibliotherapy, picture books